

# 特別活動の指導法を取り入れた 大学での授業実践と考察

澤田 敏志

## 1 はじめに

私が特別活動論の授業で出会った神奈川大学の学生は、【資料1-1】に示したように半数強が月曜日の朝は8時までで起床し、10時過ぎまで寝ている者は1割弱であった。アルバイトの状況を見ると、【資料1-2】に示した様に横浜キャンパスでは91.6%の者が週に2.4日、平塚キャンパスでは98.1%の者が週に2.0日行っていた。実施者の割合では平塚が、週の日数では横浜が多かった。家庭での学習は、平塚キャンパスでは、ほぼ全員が1時間以上の学習を週4日行っているのに比べ、横浜キャンパスでは6割の者が週3日程度であった。これは、図書館が整備され、授業の空いている時間に図書館で学習できる横浜と、そうではない平塚のキャンパス環境の違いに起因していると思われる。

この調査は、横浜キャンパスで2012年度から、平塚キャンパスで2013年度からそれぞれ3年間、筆者の特別活動論を受講した者に課した「私の1週間」と題する調査記録から得た311名の結果であり、1万8千人にも及ぶ神奈川大学全学生の傾向とは言い難いが、一応の傾向は伺える。

筆者は、自立した生活の基本は、毎朝自分で起きることにあると考え、中学・高校の教員を務めていた折には、生徒と保護

【資料1-1】月曜日の起床時間

起床時間	横浜	平塚	計	%
5時より前	1	1	2	0.6
5時台	8	10	18	5.8
6時台	43	23	66	21.2
7時台	34	42	76	24.4
8時台	33	37	70	22.5
9時台	23	29	52	16.7
10時台	6	12	18	5.8
11時台	4	2	6	1.9
12時以後	2	1	3	1.0
計	154	157	311	100

者に、自力で起きる訓練を促してきた。だから大学生になって起床時間にどのような変化があるのか、関心があり、調査の都度集計していた。再度起床時間を見ると、6時台の起床は、横浜キャンパスの者が圧倒的に多かった。大半は、学生寮や合宿所で起床し、部活動の早朝練習をしている者と、アルバイトのシフトを早朝に入

【資料1-2】アルバイトと家庭学習の状況

	項目	(単位)	横浜	平塚	計
	調査数	(人)	154	157	311
1週間当たりのアルバイトの状況	アルバイト実施者数	(人)	141	154	295
	アルバイト実施者の割合	(%)	91.6	98.1	94.9
	アルバイト総日数	(日)	345	314	659
	1人当たりのアルバイト日数	(日)	2.4	2.0	2.2
1週間当たりの家庭学習の状況	家庭学習実施者数	(人)	96	155	251
	家庭学習実施者の割合	(%)	62.3	98.7	85.1
	家庭学習総日数	(日)	301	574	875
	1人当たりの家庭学習日数	(日)	3.1	3.7	3.5

れている者であり、ここにもキャンパス環境の違いを見ることができた。

一週間を通して見ると、平塚キャンパスでは、課題レポートの作成を深夜まで行っている様子が伺え、月曜日の朝の遅い者は、大半が日曜日の深夜にアルバイトを行っていた。

調査に応じた受講生は、横浜・平塚の両キャンパスとも150台の近い数になったので、そのまま比較した。

調査に関する内容は、後述するが、【資料1-3】に示した用紙を用いて、「就寝～起床」「大学にいる時間」「課外活動」「学習」「アルバイト」「その他」に分けて着色させた。「学習」は授

【資料1-4】 振り返り (％)

振り返りの主な内容	横浜	平塚
起床時間や睡眠時間に関すること	49.4	56.7
学習時間の確保に関すること	55.2	37.6
朝食をしっかり摂ること	5.2	1.9
運動不足解消など健康に関すること	9.1	6.4

業外の活動で、大学にいる時間帯と重なる場合は上下に分けて記録させた。また、「その他」には通学の時間を除いて特記すべき事があれば記録するよう促した。記録は、何曜日から始めても良いが一週間連続することとして行い、記録終了後に振り返りとして今後の改善点を指摘させた。

結果は【資料1-4】に示したように、横浜キャンパスでは学習時間の確保に関することが過半数を占め、平塚キャンパスでは睡眠時間に関することが過半数を占めた。

この「私の1週間」は、学級担任として生徒の生活実態を把握し、的確な助言を行うために課したもので、1週間の記録をもとに振り返りを試みたことで、受講生は概ね自らの課題を捉えることができ、ねらいは達成できたと思う。

このように、本レポートは、特別活動の指導法を取り入れた大学での演習を中心とする授業実践について考察をすすめ、併せて特別活動論テキストとして作成した「為すことによって学ぶ」を紹介した。

特別活動 課題		私の 1 週間																								【資料1-3】	
学科名																										下の表に指示に従い、自分の1週間の生活を記録して、自らの課題を発見しなさい。	
学籍番号																											
氏 名																											
曜日	月日	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24						
月																											
火																											
水																											
木																											
金																											
土																											
日																											
記入事項	<div style="display: flex; justify-content: space-between; font-size: small;"> <span>就寝～起床</span> <span>大学にいる時間</span> <span>課外活動</span> <span>学習</span> <span>アルバイト</span> <span>( )</span> </div> <div style="margin-top: 5px;">                         ※( )は各自で項目を指定    学習は授業以外    <span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 10px; height: 10px;"></span> マーカー等で着色                     </div> <div style="margin-top: 5px;">                         「大学にいる時間」と「課外活動」「学習」が重なる場合は、上下に分けて記すと良い                     </div>																										
振り返り	1週間の生活を振り返って、自らが改善した方が良いと思うことを指摘しなさい。また、どうして改善した方が良かったのかについても述べなさい。																										

## 2 特別活動論の授業計画

特別活動論の授業は、次頁の【資料2-1】の「授業の進め方と学習方法」を受講生に示して、横浜・平塚の両キャンパスとも同じように展開した。

### 【資料2-1】特別活動論/授業の進め方と学習の方法

#### (1) 到達目標

学校生活における「特別活動」は、生徒が集団の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的・実践的な態度を育てることを目標とします。そこで本授業では、受講生自らが、演習を通して魅力的な特別活動のあり方を模索し、人間としての在り方生き方について自覚を深め、自己を生かす能力を養うことを目指します。

#### (2) 授業内容

将来、教師を目指し、その免許状を取得しようとする人が受講するものです。

中学や高校の教員免許状は、教科によって発行されますが、教員の仕事は教科指導だけではなく、学級・ホームルーム活動や生徒会活動、さらには学校行事を通して生徒と関わることが多くあります。そこで、この授業では受講生の演習（グループワーク）を中心に課題の解決を試みます。受講人数に応じて演習や発表の形態、ならびに授業計画を調整します。

#### (3) 授業計画

##### ①オリエンテーション

授業のすすめ方と学習の方法等について  
(データ記入等)

##### ②教育課程における「特別活動」

教育課程と「特別活動」

〔課題〕特別活動「目標」の学校種による違いとは

##### ③特別活動の内容Ⅰ〔学級・HR活動〕

学級・HR経営と担任の役割  
学習活動の支援

##### ④特別活動の内容Ⅰ〔学級・HR活動〕

生徒の人間関係の把握について

※ソシオメトリーと担任の関わり

〔課題〕私の一週間

##### ⑤特別活動の内容Ⅰ〔学級・HR活動〕

〔演習〕発表と相互評価

※私の学級活動

##### ⑥特別活動の内容Ⅱ〔生徒会活動〕

生徒会活動の意義と支援の在り方

〔課題〕文化祭での活動体験と特別活動論を  
学んだ今だからできる当時の自分への  
助言

##### ⑦特別活動の内容Ⅲ〔学校行事〕

行事の内容とねらい

〔課題〕研修旅行計画

##### ⑧特別活動の内容Ⅲ〔学校行事〕

旅行・宿泊の行事への取り組み

※VTR(沖縄の歴史)視聴記録

##### ⑨特別活動の内容Ⅲ〔学校行事〕

〔演習〕グループ活動

研修旅行企画(要項)作成

##### ⑩特別活動の内容Ⅲ〔学校行事〕

〔演習〕グループ活動

研修旅行企画(要項)作成

##### ⑪特別活動の内容Ⅲ〔学校行事〕

〔演習〕グループ活動

研修旅行模擬説明会と相互評価

##### ⑫特別活動の内容Ⅲ〔学校行事〕

〔演習〕グループ活動

研修旅行模擬説明会と相互評価

##### ⑬ボランティア活動

学校におけるボランティア教育

〔演習〕グループ活動/ボランティア活動企  
画

##### ⑭部活動

部活動が抱える問題点と解決への模索

##### ⑮振り返り post-test

#### (4) 時間外学習について

①予習、復習として特別活動論テキスト「為す  
ことによって学ぶ」の該当箇所を読む。

②予め演習の課題が提示されているので、自ら

でレポートできるよう準備しておく。

#### (5) 授業運営

授業は、講義形態で伝達するのではなく、受講生のグループワークや演習を通じて特別活動の意義を見出し、自らの経験と比較しながら特別活動の望ましいあり方を検討します。

#### (6) 評価方法

評価は、授業課題レポート(40%)、演習相互評価(40%)最終試験(20%)を基本的な配分として行います。欠席過多(5回以上)は評価しません。

#### (7) オフィスアワー

主に、毎回の授業の前後等の時間で受けます。

#### (8) 使用書

『為すことによって学ぶ』

特別活動論テキスト(神奈川大学教職課程)

#### (9) 参考書

文部科学省『高等学校学習指導要領解 特別活動』『中学校学習指導要領解 特別活動』

### 3 特別活動論の授業展開

#### (1) 特別活動とは

授業は「特別活動とは何か」、という疑問に答えることから始めた。それは学習指導要領に記されている教育課程のひとつの領域であり、小学校では、「学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事」を内容とし、中学校と高等学校では、「学級活動・ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事」を内容としていることを説明した。続けて、「特別活動」の配当時間に触れ、年間の総授業時数には、週1時間の学級・ホームルーム活動の

みが示されているが、「生徒会活動及び学校行事については、それらの内容に応じ、年間、学期ごと、月ごとなどに適切な授業時数を充てるものとする。」とされていることを補った。

更に現行の学習指導要における特別活動の目標を学校種別に読み合わせ、比較させた。

【資料3-1】に示した特別活動の目標構造を用いて、学校種により上位目標が異なることに着目させた。

特別活動は、「望まして集団活動を通して」、中学校は「人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。」とされ、高等学校は「人間としての在り方」が加えられ、「人間としての在り方生き方」とされている。小学校は「自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。」と記されていることから、学校種による上位目標の違いを考察することを課題とした。グループで意見交換を行い、「学習指導要領解説 特別活動編」から次の部分を抜き出し、児童生徒の発達段階に応じた上位目標になっていることを確認した。

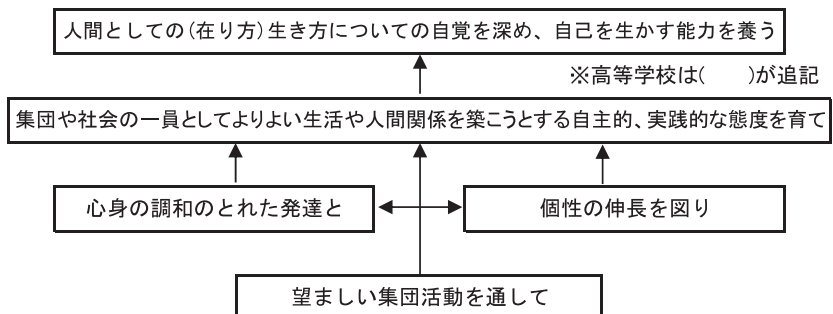
##### ○小学校

集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする多様な集団活動を通して、望ましい認識が持てるようにするとともに、集団の中で自己を生かす能力を養っていく。

##### ○中学校

中学生の時期は、親への依存から離れ、自らの行動は自ら選択決定したいという独立や自律の要求を高めていく。…自己の判断力、価値観

#### 【資料3-1】 中学校・高等学校の「特別活動」の目標構造(2009年改訂)



を養い、主体的に物事を選択決定し、責任ある行動をすることができるよう、人間としての生き方についての自覚を深めさせ、集団や社会の中で自己を生かす能力を養わせていくことが大切である。

#### ○高等学校

高校生の時期は、中学生の時期より更に、自らの行動は自ら選択決定したいという独立や自律の要求が高まっている。…自己をありのままに認め、自己に対する洞察を深めること、これらを基盤に自らの追求しつつある目標を確立し、また明確化していくことが大切。

その上で、中学校や高校での「人間としての（在り方）生き方について自覚を深める」活動体験を600字以内のレポートにまとめさせた。

活動体験は、部活動に関わるものが大多数で、特別活動での体験は、合唱コンクール、文化祭、体育祭、修学旅行など、学校行事に関わるものが多かった。

教育課程に含まれないとはいえ、部活動が中高生の学校生活に深く関わり、「人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。」ものと理解されていることが再認識できた。

### （2）学級・ホームルーム活動

#### ①「学習集団」としての支援

学級・ホームルーム（以下は「学級」と表記する。）活動では、学級がどんな機能を持つのか、ということに重点をおいて扱った。

学級には「学習集団」と「生活集団」の二つの機能があり、学級担任はこの二つの機能を十分に理解して運営することが必要であることを、次のように説明した。

まず、「学級の目標」に触れ、それは「学校教育目標」を具現するために設けられるものであること、運営にあたっては、二つの集団として持つ機能を満足させるように努めることを求めた。

「学習集団」としては、授業の場面を想定し、集団思考や共同作業を通して教科学習の活発化をねらうために「助け合い」を基盤においた次の二つの実践を紹介した。

#### ア. 学習活動の支援 ＝授業への取り組み

学級組織に教科を担当する係として“教科学習係”を設け、帰りの学級活動（SHR）で、明日の授業の連絡（内容は、持ち物は、宿題は）を行った。教室の移動の連絡や用具の準備（教室まで運ぶ等）のほか、定期考査前に、予想問題を作成して放課後に学習会を行い、“助け合い学習”を行った。保健体育や音楽でも、鉄棒やリコーダーのテストの前には、練習の補助も

【資料3-2-1】		私の一週間																					
		1年	組	番	氏名																		
次の表に、起床・出発・帰宅・家庭学習・塾や習い事・就寝などを書き入れなさい。																							
		5	6	7	8	13				14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24			
月		学 校																					
火		学 校																					
水		学 校																					
木		学 校																					
金		学 校																					
土		学 校																					
・家庭学習の一日の平均時間は ・家庭学習は、具体的にどんな科目をどの様にして ・家庭学習において最も多くの時間を費やした教科は ・中学校の授業を受けて、今、一番楽しみにしている教科は																							

行った。

もうひとつは、学級組織に「生活班」を設け、宿題や定期考査の前の補助を放課後に、県下一斉の学力検査の前には、日曜日にも利用した。これらを“助け合い学習”と呼称したこと。

更に、欠席したともだちへの支援として、ノートを作成したこと。これは、生徒の提案で始まった活動のひとつで、コピーが普及している現在なら簡単なことだが、当時は班員が欠席者のノートを分担して整理した。休んでいる者への思いを形にして渡すという活動が、その後さまざまな場面に波及したことにも触れた。

#### イ. 家庭学習の定着を図る取り組み

一斉授業において集団思考ができる「学習集団」をつくる為には、生徒一人ひとりの学習に取り組む姿勢を整える必要があり、それには家庭学習の習慣化を図ることが大切であることを説いた。筆者は、前頁の【資料3-2-1】を用いて生徒の一週間を単位とした生活実態を探ることから始めた。ここでは計画的に家庭学習の時間を作り出すことを中心に助言し、励まし続けた。生徒が異なる家庭環境にあることを考慮し、それぞれの生活の中でどのようにして時間をつくりだすか、一緒に考えることを大切にしたい。

また、家庭学習の時間の長短にこだわらず、回復することの大切さを繰り返し助言した。

次に一週間の家庭学習を計画させた。週末の土曜日に、翌日の日曜日から次の土曜日までの一週間分の家庭学習をどの時間帯で行うのか、帰りの学級活動で計画を立てさせた。

それをもとに、【資料3-2-2】を用い、帰りの学級活動（SHR）で、教科学習係が連絡する明日の授業の予定を「明日の学習」の欄に、同時に今日の家庭学習の内容を「家庭学習」の欄に記入させた。「学習時間帯」の欄には実際に行った学習時間帯と就寝の時間を記入させた。これを毎授業日に実施した。

このような取り組みを勤務した各学校において実施したが、横浜市立永田中学校では同僚の担任3名と自費で「生活の記録（日々の記録）」を印刷製本して、一年間を通して実践した。そして実践報告を同校の10周年記念冊子「軌跡」に発表した。アンケートの集約結果を見ると、7割弱の生徒が記録をつけることが習慣化され、半数を超える者が、生活が変わったことを実感していた。授業では次頁の【資料3-2-3】を示して記録による振り返りの必要を説いた。

その上で、「1はじめに」に示した【資料1-3】の用紙を配付し、「自分の一週間の生活を記録

【資料3-2-2】		私の家庭学習									
[ ] 月 [ ] 日											
明日【 月 日(火)】の授業						今日(月曜日)の家庭学習					
	教科・科目	内容・持ち物				教科・科目	具体的な内容				予定時間
1											
2											
3											
4											
5											
6											
家庭学習を実際に行った時間帯											
時間帯	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00	0:00	合計時間	今日までの累計時間	
学習時間帯									分	時間	分
[学習後の感想]											



し、記録をもとに振り返りを行い、改善すべき課題を見つけてみよう。」ということを通した。

これは、受講生が教員として生徒と向き合う際、自らの体験を通して語り、寄り添うことができることを期待したものである。

## ②「生活集団」としての支援

学級のもう一つの機能である「生活集団」として支援する上で大切なことは、集団意識や道徳性・公民性の育成をねらうことであり、そのため学級を民主主義の体験的活動の場と捉えこ

とである。特に学級の合意を形成する作業を厭わないことを大切にしなければならない。安易に多数決で決めるのではなく、少数意見を取り入れた成案の作成などを丁寧に進めることで民主的な学級経営ができると考え実践してきたを伝えた。

併せて、日常の指導においては、「反射的行動様式」を求めるのではなく、ひとつひとつの行動の価値を知り、なぜそうすることがよいのかを理解し、自発的に行動する「判断的行動様式」を粘り強く求めなければならないことを伝えた。例えば、「チャイムが鳴ったら席に着く」ことを目標とする場合でも、条件反射的な行動を求めるのではなく、授業間に設けられている休憩時間の意味を一緒に考えた。そして、それは授業の準備のために設けられた時間であり、次のような行動が求められることを説明した。

- ・トイレに行っておく（生理的準備）
- ・教室の移動を行う（物理的準備）

【資料3-2-3】「生活の記録」実践後のアンケート調査結果

設問		項目	人数（人）	学級全体の割合（％）
いつもきちんとつけていますか		つけている	10	23.3
		つける時とつけない時がある	20	46.5
		ほとんどつけない	13	30.2
つける前と後では何か変わりましたか		変わった	23	53.5
		変わらない	7	16.3
		わからない	13	30.2
変わった人は、どのように変わりましたか。学習と生活の面で記入しなさい	学習時間	宿題を忘れなくなった	1	2.3
		思い出して勉強するようになった	1	2.3
		時間が増えた	8	18.6
		時間帯が決まるようになった	4	9.3
		計画的にできるようになった	11	25.6
		まとまった勉強ができるようになった	3	7.0
		夜勉強するようになった	1	2.3
	生活全体	規則的になった	10	23.3
		寝る時間が早くなった	1	2.3
		テレビを見る時間が増えた	2	4.7
		テレビを見る時間が減った	9	20.9
		ゆとりができた	1	2.3

横浜市立永田中学校10周年記念誌「軌跡」に掲載した「校内研究10年の歩み」から

・次の学習内容に目を通す（学習的準備）  
従って、保健室で手当てや相談をしたようなときは、遅れることもあり、廊下を走って間に合わせようとするの方が危険だと補足した。

## ③学級の二つの機能の関連を図るために

筆者は、「学習集団」としての機能を持つ学級で身に付けた知識や技能を、「生活集団」としての学級でどのように活用させるのかが、学級担任に求められる“経営力”だと理解して取り組んできた。その取り組みの一部を「私の学級経営 ～40年目の振り返り～」と題して、2015年3月発行の「神奈川大学 心理・教育論集 第37号」に発表した。

学級に“生活班”を設け、日常の集団生活に必要な仕事を分担した。学級のレクリエーションを行う際も、班で協議したことを学級全体で更に協議を重ねてから実施した。また、週に一

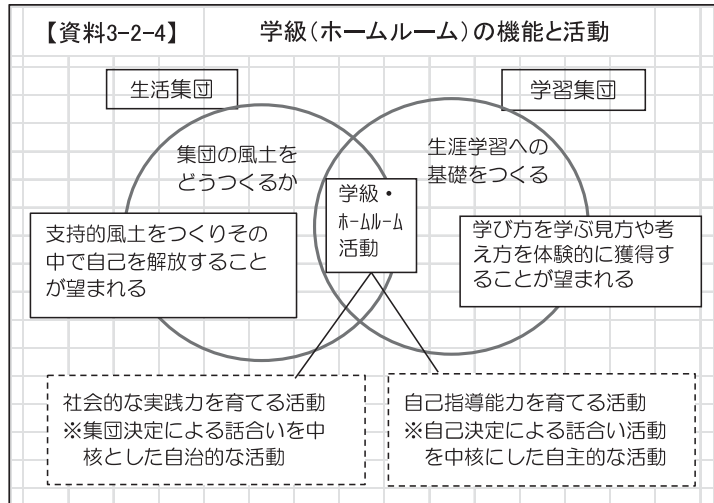
度、班長会を開き意見交換を行った。

【資料3-2-4】に示したように、二つの機能は重ね合わせることで理念を内面化することができ、社会的な実践力や自己指導力が育つと考えている。つまり、内発的行動として一つの行動を生む条件を整えるためには、行動を形式化するのではなく、ひとつひとつの行動の価値を知り、自発的に行動することが大切だと考えて取り組んできた。

判断的行動様式を育むためには、理念を共有することが最低条件であり、そうすることで、学級の活動に全員が参加して楽しむことは良いことだということを知識として知ることができる、と受講生に伝えてきた。そこで、次のような課題を課した。

「【課題】中学生のときに体験した「学級活動」の中から、記憶に残るものをひとつ取り上げて、どのような活動を行ったのか600字以内で説明しなさい。」

その発表を聴いて、要点を新聞の見出しのように整理する作業と相互評価を行う演習を試みた。【資料3-2-5】は、その際の記録用紙の一部である。発表された活動は「合唱コンクール」の取り組みが多数で、次にボランティア活動が多かった。



記録として要求した体言止めの文章は苦手のように、新聞記事の「見出し」と「リード」と「本文」の関係を説明する機会にもなった。

2016年度からは、末尾に付けた特別活動論テキスト「為すことによって学ぶ」を使用し、受講生が多い教室では、神奈川大学人間科学部非常勤講師の齋藤元先生が作成した【演習②-B】の「中学3年生の学級開き」をグループワークとして行っている。「新しい学年のスタートは中学3年生になった生徒も、期待に胸を弾ませている」「生徒の期待に応え、学級づくりの第一歩として印象深いものにする」「義務教育最後の年を意識し中学最後の行事や進路決定をみんなで共に創り上げていく雰囲気をつくり、生徒のやる気と仲間の結びつきを強める活動を行う」という三点に留意して、3人のグループ

【資料3-2-5】			「私の学級活動発表」の記録用紙										
発表者の学級活動の特徴を簡潔に整理し、「新聞記事の見出し」として記録し、発表内容を次の基準に基づいて評価しなさい。													
A=よく理解できた			B=まあまあ理解できた			C=あまり理解できなかった			(該当する記号に○印を付ける)				
1	発表者	学科	要点							評価	A	B	C
2	発表者	学科	要点							評価	A	B	C
3	発表者	学科	要点							評価	A	B	C



で持ち寄ったものを一つにまとめて発表し、相互評価を行い、「期待に胸を弾ませている生徒の期待に応えられる話」、「生徒のやる気を出させる話」、「学級担任としての思いを伝えられる話」にするために大切なことを学び合いとした。

いずれにしても、学級活動の評価は、生徒たちが約束したことを機械的に守るようになったかどうかではなく、「どのような理念を内面化しつつあるか」を大切にすべきであることを繰り返し伝えた。

#### ④学級・ホームルームにおける教育相談

教育相談については、次の三点について説明し、生徒ひとり一人の記録を作成するとともに、道徳の授業の後に生徒の感想を記したノートを使って、週に一度は交換ノートを行った実践を述べ、次の内容を説明した。

##### ア．学業相談（educational counseling）

学習の習慣・勉強の技術

- ・学習計画の立て方
- ・能率的な勉強法
- ・授業の受け方
- ・効果的な記憶術
- ・参考書や問題集の利用法
- ・ノートの取り方や作り方
- ・答案の書き方

##### イ．進路相談（vocational counseling）

将来の進学や就職の相談 ⇒可能性をより大きく残して前進を

- ・能力
- ・適性
- ・興味
- ・健康
- ・家庭事情

##### ウ．情緒適応相談（personal counseling）

個人および集団の一員としての在り方に関すること。

- ・新しい学校生活への適応
- ・個人的な悩みや不安の解消
- ・望ましい人間関係の確立

その上で、次頁の【資料3-2-6】に示したソシオメトリーの集計表を用いてグループワークを行った。

ソシオメトリーは、ヤコブ・レヴィ・モレノ（Jacob Levy Moreno, 1889-1974）により1953年に考案されたもので、日本では旧東京教育大学（現、筑波大学）教育学部教授田中熊二郎先生の「ソシオメトリックテスト」を学生時代に学び、学級の人間関係を客観視する資料に用いてきた。

それは、集団内の対人間の心理的關係や集団構造の測定、分析に関する理論で、集団を相互に比較することを可能にし、人間関係の結合の強さを数量的・客観的に表示できることを、集計表を用いて説明した。

次頁【資料3-2-6】の表は、筆者が次の条件の下で行った調査の集計である。

- ・中学校1年生の学級
- ・入学後1か月ぐらいの時期
- ・学級で班別対抗レクリエーション（球技）を行うので  
一緒に班になりたい者を5人まで  
一緒に班にはなりたくない者を5人まで  
順番に記名する

グループワークは、受講生が集計の数字を手掛かりに気になる生徒を抽出し、その生徒の特徴を想定した上で、教員としてどのように寄り添い支援することが望ましいのかを考察させた。

最も多くの者が選択した生徒は39番で、被選択が0に対して被排斥が10、相互排斥が2で、社会測定地位得点がマイナス12と、集団で最も低い得点が注目を集めた。

反対に11番の生徒は、被選択が10、相互選択4、被排斥は0で社会測定地位得点が14と集団で最も高く、集団のリーダー的存在して注目を集めた。

生徒に対して想定した特徴はいくつもあり、

	男 子																				女 子																				PVR	MPV	NVR	MNV	社会測定
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	被選択	相互選択	被排斥	相互排斥	SSS	
男  子	1		(3)	2		4	a				(1)	1		(1)	1	1	(2)		(3)		4					5	a			(a)							a	(a)	11	5	2	1	13		
	2	(4)		(3)		b	b	(1)	(1)			2		1	(2)		5	a					a	d			(b)				e					a	b	7	5	6	1	5			
	3		(4)			a	5																																4	1	6	1	-2		
	4						(3)									4			(1)															a	a	b	c	3	2	0	0	5			
	5				a				(2)				a	a			a				c		b	a						b			a	a	b	c	1	1	12	0	-10				
	6				3			(1)			4		2						2			c	b		a		e				c						5	1	5	0	1				
	7			(4)	5	(1)				3			2		2				3				c															7	2	1	0	8			
	8		(5)			(1)		4		(2)												d													b			5	3	2	0	6			
	9	(1)	(5)			2			(3)					3	(3)			4	4																		(g)	8	4	1	1	10			
	10				2	2						a				(3)				(4)	(2)													d	e		5	3	3	0	5				
	11	(1)			5			4				(3)	(3)					(1)	1	(5)	(5)	5				4						4						10	4	0	0	14			
	12					5			3			(3)				4		(5)	(4)																			6	3	0	0	9			
	13				3		2								4			(3)						a						a			a					4	1	3	0	2			
	14	(3)	(2)	(4)		4			5	(4)															b					a								6	4	2	0	8			
	15											(5)																											0	0	0	0	0		
	16			1							(5)		(4)		(5)				2	(1)							5					5							6	2	0	0	8		
	17	(5)										(4)		(5)																									3	3	0	0	6		
	18								e				(4)						(5)																				2	2	1	0	3		
	19			(1)		3			(2)			(5)																																	

グループワークにおいてそれぞれに寄り添いの考察がなされ、生徒指導の演習にもなった。

集計は、横浜キャンパスの2014年度29名と2015年35名、それに平塚キャンパスの2015年80名を加えた144名のものである。

彼らのレポートから、どの生徒を選択し、数字の読み取りからどんな特徴を想定したのかを簡単に整理したものの一部を【資料3-2-7】として示した。

順位	選択した生徒の番号	選択した受講生の数	%	【資料3-2-7】 学生が選んだ生徒と想定した特徴
				想定した生徒の特徴
1	39	32	22.2	日常生活で女子から好かれていない
				運動が苦手で、自己主張が強い
				周囲に媚びを売るぶりっ子タイプ
				男子にも女子にも自分のことを自慢しているのではないか
				小学生のときに何か問題を起こしてしまった子では
2	11	23	16.0	一定の発言権を持ちクラスをまとめることができる生徒だと思う
				スポーツ万能で誰とでも仲良くできる人
				運動神経が高く、友達からの信頼も厚く、まあまあ女子に人気がある
				誰からも好かれ、よく考えてから行動するタイプではないか
3	5	21	14.6	クラスの中心になり得る生徒だと思う
				周りの人間を意図せずに不愉快にしまう人
				人づきあいが苦手なタイプ、周囲の目に鈍感なのでは
				運動神経がよくないかそう見える体型をしている
				口が悪かったり乱暴だったりガキ大将のような生徒
4	15	18	12.5	自己中心的な行動や気が付かないけど周りに迷惑を掛けている可能性がある
				明るい子、新しい環境に馴染めずにいる
				コミュニケーションスキルの欠如
				自ら進んでコミュニケーションを取ろうとしない
5	1	12	8.3	内気で人見知り
				多くの生徒に信頼されているに違いない
				ひとつのグループの中心的人物になっていると思う
				人気者でスポーツができる人
計		144	100	明るく運動神経が高いから支持が集まる

### (3) 生徒会活動

生徒会活動は、目標から「望ましい人間関係を形成」することと「自主的、実践的な態度を育てる」ことを要点として取りあげ、「高等学校学習指導要領解説 特別活動編」に示された次の内容を紹介して理解に努めた。

#### ア. 望ましい人間関係を形成

生徒会活動で育てたい「望ましい人間関係」

とは、豊かで充実した学校生活づくりのために、一人一人の生徒が生徒会組織の一員としての自覚と責任感を持ち、共に協力し、信頼し支え合おうとする人間関係である。また、ボランティア活動など奉仕の精神を養う社会的活動への参画や協力、他校や小学校・中学校との交流、地域の人々との幅広い交流など、学校外における活動を通して、他者を尊重し、共によりよい集団生活や社会生活を築こうとする開かれた人

間関係である。

### イ. 自主的、実践的な態度を育てる

生徒会活動で育てたい「自主的、実践的な態度」とは、生徒自ら目標をもち、学校や社会の一員としてよりよい学校生活へ貢献するための役割や責任を果たし、学校生活全体の充実・向上にかかわる問題について、みんなで話し合って協力して解決したり、集団や社会の一員としての自覚に基づき、学校や地域社会の生活の充実・向上に積極的に関わったりしていく自主的、実践的な態度である

その上で、生徒会活動の内容を紹介し、神奈川県立高等学校がホームページで公開している生徒会組織を集約して作成した生徒会組織図(【資料3-3】)を示し、議決機関と執行機関について説明し、それぞれの機関において、指導の際に心掛けなければならないことに時間を割いた。

まず「議決機関」を指導する際に心掛けることは、組織の意思を決定する際、どのようにし

て民主的に合意を形成するかということであり、安易に多数決を用いず、少数意見を取り入れて成案を作成する手立てを講じることが大切であることを強調した。

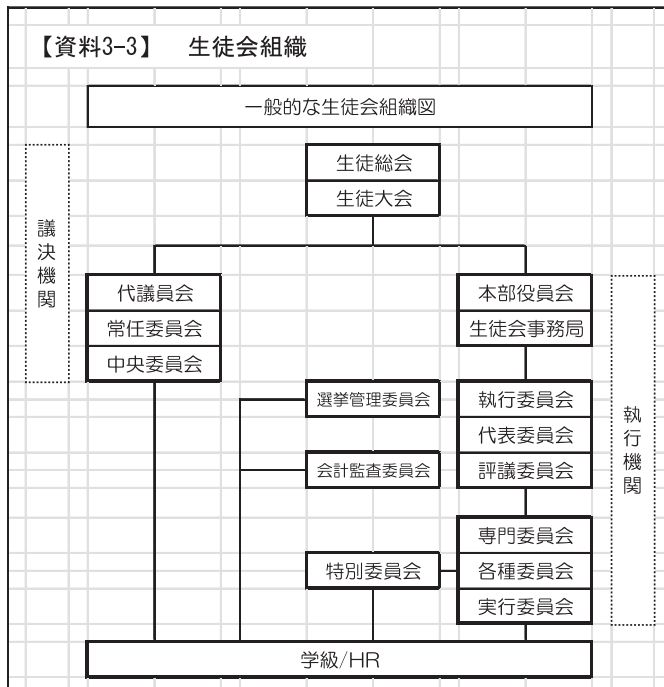
特に、中学生には民主的な手続きを指導することが求められ、そこから主権者教育に繋がることにも触れた。

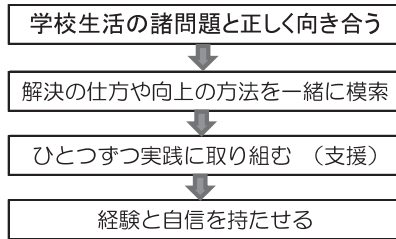
「執行機関」を指導する際は、生徒会の実践的活動を担う機関だから、機関の意思決定に留まらず、活動をどのように推進していくかに重点を置いて指導することが必要で、「継続的活動を行うこと」と「組織の役割を明確化すること」の理解に努めた。

つまり、教員は「何を」「どのように」「行っていくか」を支援する立場にあることを説き、生徒が自らの学校生活の改善と向上の問題を見つけ、その解決を試みる活動を支援するためには、無気力・無責任・無関心・無感動といわれる生徒の問題意識を掘り起こすことから始め、その為には、具体的な解決策と一緒に模索し、実践して、経験と自信を持たせることが大切なことを、筆者の実践を紹介して補った。

また、その際注意することは、自治的活動とはいえ、どこまでも学校教育目標に添うものでなければならないこと、そのため予め学校の態度を明確にしておくことが必要なことを付け加え、次の生徒会指導の事例を紹介した。

それは、1974(昭和49)年に横浜市立蒔田中学校の学年分校で学年生徒会を組織し、金子保雄校長の援助を得て、昇降口へ続く通路の泥濘<sup>ぬかるみ</sup>を改修したことである。(神奈川大学 人文学研究所報 No48/2012年8月発行/に『学校教育における「特別活動」再考の視点』に発表済)そして、指導のステップを次のように示した。





その後、次の演習課題を示した。

「あなたが勤務する高等学校に近隣の住民から、最寄駅からの通学路に関する次のような苦情が寄せられました。

- 1 生徒が歩道を横に広がって歩くため、駅に向かう住民が歩行困難になる。
- 2 雨の日やベビーカーを押しての交差では道を譲って貰えない。
- 3 信号の無い交差点では、集団登校の小学生が待たされている。

そこで、生徒会を動かしてこれらの問題を解決していくための指導企画書を作成しなさい。」

これは、都市部の高等学校、特に近くで住宅開発が行われた地域で起こり得ることと紹介し、対策の取り組みが一過性のイベントで終わるのではなく、継続して取り組める内容についてグループワークを試みた。

後期の授業では課題を変え、高等学校の生徒会活動が低迷している状況から抜け出す一助となることを期待して、自らの振り返りを求める次の課題を用意した。

「あなたが過ごした高等学校の文化祭において、どのような活動をしたのか、自己の体験・経験を述べ、その当時の自分に話しかけることができると思ったら、どんなことをアドバイスしたいと思いますか。特別活動論を学んだ今からできるアドバイスを記しなさい。前段に活動体験、後段に自分へのアドバイスを600字以内で述べなさい。」

大多数の者は、文化祭に企画から参加し、自らの行動を振り返りつつ、どこを改善すれば更に成長が期待できたかを纏めていたが、中には、運動部の招待試合のみや、呼び込みと称して遊び歩いている体験もあり、学校による文化的行事への取り組みの差が大きいことを知ることにもなった。

#### （４）学校行事

##### ①学習指導要領から

学校行事では、学習指導要領の記載事項を通して学校行事の意味を理解できるように努めた。その上で、教員として旅行・集団宿泊的行事に取り組むことを想定し、望ましい計画作成の演習を行った。

『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』には「学校行事は、全校若しくは学年又はそれに準ずる比較的大きな集団の中で、生徒の積極的な参加による体験的な活動を行うことによって、学校生活に秩序と変化を与え、全校及び学年集団への所属感や連帯感を深め、日常の学習の総合的な発展を図るとともに、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行うものである。」と、記されている。その中から、「学校生活に秩序と変化」と「集団への所属感」を取りあげ、教育課程において教科指導が年間総授業時数の8割を超えている状況で、この二つが学校生活にもつ意味を一緒に考察した。

また、「入学式や卒業式などにおいては、その意義を踏まえ、国旗を掲揚するとともに、国歌を斉唱するよう指導するものとする。」と示されていることから、平成11年8月に制定された「国旗及び国歌に関する法律」を紹介し、制定の背景にも触れた。

##### ②沖縄研修計画案作成

演習に先立って、旅行・集団宿泊的行事の実施にあたっては、学校種の区別なく、教科や道徳、総合的な学習の時間との関連を図り、事前および事後の指導を十分に行うことが大切にさ

れることを説明した。そして、「実務上」「安全上」「計画作成上」に分けて次のように留意すべきことを紹介した。

#### ア. 実務上の留意点

- ・学校教育の一環として行う行事だから、計画から実施まで細部にわたって学校が主体性を持つことが大切。したがって、旅行業者に任せきりにしてはいけない。
- ・物見遊山や観光旅行に終わらせないため、その教育的意義をふまえ創意工夫すること。特に個人が目的を持って参加できるよう配慮することが大切。
- ・計画の作成にあたっては生徒の自主的活動の場を取り入れること。
- ・予め実地踏査を行い、現地の状況や所要時間を把握し、無理のない日程を作成すること。
- ・出発前から生徒の健康観察を行い個々の健康状態を把握しておくこと。必要に応じて健康相談を行うこと。

#### イ. 安全上の留意点

- ・安全対策に「し過ぎる」ことはない。生徒の行動に合わせてあらゆる可能性を想定し、事故防止に万全を期すことが大切。
- ・利用する交通手段や宿泊施設に応じその利用方法や緊急時の避難方法を周知すること。
- ・気象情報に注意し天候により臨機応変な措置が講じられるよう事前に予備の計画を設けておくこと。更に予定の変更を生徒に周知できる体制づくりも必要なこと。
- ・目的地の宿泊施設や食事提供施設の衛生状態については保健所と、宿泊施設の防火や避難の対策については消防署と連絡を取り、協力を求めること。
- ・目的地の病院に協力を求め、夜間診療体制に

もついても事前に確認しておくこと。

- ・必ず事前に実地踏査（下見）を行い、安全対策を講ずること。
- ・実施中の緊急連絡体制および支援体制を事前に整備しておくこと。

#### ウ. 計画作成上の留意点

- ・学習指導要領に示された旅行・集団宿泊的行事の目標を踏まえた内容とすることが大切。
- ・「平素と異なる生活環境」になぜ出かけるのか、そこでどんな体験活動ができるのか、体験活動を通して気付いたことを振り返ったり、まとめたり、発表し合うには適切な活動だろうか、ということ踏まえる必要がある。
- ・体験活動は、次の三つのプログラムを組み合わせ、生徒の発達段階に応じて、「一斉プログラム」より「自主プログラム」の割合を増すこと。

##### ◎一斉プログラム

…全員が一斉に同じ体験をする活動

##### ◎選択プログラム

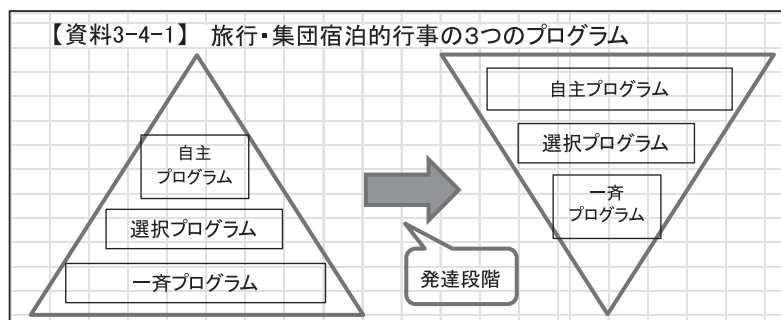
…個人の意思で体験が選択できる活動

##### ◎自主プログラム

…自らが計画を組み上げて体験する活動

三つのプログラムについては、【資料3-4-1】に示した図を用いて、全体計画に占めるプログラムの比重が発達段階に応じて変化することを、重ねて強調した。

更に、筆者が神奈川大学附属中・高等学校で実践した事例（神奈川大学 心理・教育論集





第40号に「総合的な学習の時間の考察と試み」として紹介)を通して、「目標の内容」と「三つのプログラム」を表にしたマトリックスに、体験活動の場所と内容を記入し、もう一度その行事のねらいに沿うのかを検証し、それから、それを行程表に作り変えていく作業を行うことを説明した。また、行程表を作成していく際には、移動時間や方法、昼食や休憩施設にも配慮する必要があること、その作業を通して、同じような体験がもっと別の場所でも行えることに気付いたりすること、もちろん宿泊施設の検討が不可欠なことも紹介した。

演習は、高校1年生が沖縄で3泊4日の研修旅行を行うことを想定し、要項の作成と、パワーポイントを用いて保護者会で説明することを課した。要項は、次の予め最小限度の項目を

#### 【資料 3-4-2】

特別活動論【演習4-A】 旅行・宿泊の行事計画書 (個人用) 第1回				
テ ー マ				
テーマ設定の理由				
主な見学地	施設の名称	入場料・見学科	施設の名称	入場料・見学科
第1日目		円		円
第2日目		円		円
第3日目		円		円
第4日目		円		円
プログラムのマトリックス図				
目標の内容	一斉プログラム	選択プログラム	自主プログラム	
見聞を広める望ましい体験				
自然や文化に親しむ望ましい体験				
集団の規律や公衆道徳についての望ましい体験				
学 科	学 科	所属班	評価	
学籍番号		実施月日		
カ ナ				
氏 名				

記した用紙を配付した。

(1) 題名	( ) 高校沖縄研修旅行実施要項
(2) テーマ及び目的	
(3) テーマ設定の理由	
(4) 事前学習と事後の報告について	
(5) 主な訪問地	
(6) 宿泊施設と住所・連絡先	
(7) 行 程	
(8) 引率教員(省略)	
(9) 費用内訳(一人当たりの金額、概算)	
	・ 航空運賃・宿泊費・バス代
	・ 見学科等・合計金額
(10) その他	①取扱旅行業者(省略)
	②注意事項

計画は各自が【資料3-4-2】の用紙を用いて「テーマ」「テーマ設定の理由」「主な見学地」

「プログラムのマトリックス」を記入したものを持ち寄り、3名のグループでインターネット検索を駆使して作成した。

筆者は作業中のグループを巡回して、行程や宿泊施設の相談を受け、助言を与えた。航空運賃の団体料金や宿泊料金の算出で頓挫するグループが多く、ANAのホームページから「学校研修割引運賃東京→那覇間の場合」を提示し、時期により運賃が変わることを伝えた。また、宿泊料金は、筆者の経験で相場を伝えて作成した。

「要項」は、コピーして各グループに配付し、「保護者が見て、必要最小限のことは記載されているか」「集められた費用の使い道が理解できるか」の二項目を評価させた。

発表は【資料3-4-3】の写真のように、リクルートスーツを着用して行うグループも見られ、模擬

【資料 3-4-3】



説明会への取り組みにも真剣さが見られるようになった。

グループ発表の相互評価項目は、次の4点を予め示した。発表の順番も予め抽選で決定した。

【資料 3-4-4】

特別活動論 演習③-1		2017年「沖縄研修企画発表」の記録用紙		4限1回目						
【3段階評価】 各班の要項及び説明が提示された要件を満たしているか、次の基準に基づいて評価しなさい。 3点=十分満たしている 2点=まあまあ満たしている 1点=満たしていないことが多い										
I 説明に対する評価		班	1	2	3	4	5	6	7	8
評価項目										
① 計画の内容が特別活動の目標を満たしているか										
② 企画の内容は高校生が興味を持って取り組めるか										
③ 安全対策を踏まえた計画になっているか										
④ パワーポイントは必要な事項を見やすく表しているか										
合計点										
II 要項に対する評価		班	1	2	3	4	5	6	7	8
評価項目										
① 保護者が見て、必要最小限のことは記載されているか										
② 集められた費用の使い道が理解できるか										
合計点										
※保護者が安心して子どもを送り出せる旅行・集団宿泊の行事を計画するために必要なことは何か。										
所属班		実施日		評価						
カナ										
氏名										

- ①計画の内容が特別活動の目標を満たしているか
- ②企画の内容は高校生が興味を持って取り組めるか
- ③安全対策を踏まえた計画になっているか
- ④パワーポイントは必要な事項を見やすく表しているか

【資料3-4-4】に示したように、

各項目の相互評価は3段階で記入させ、その平均値の合計をグループの得点とした。更に、相互評価の後に、「保護者が安心して子どもを送り出せる旅行・集団宿泊の行事を計画するために必要なことは何か。」を考察させ、それを個人レポートの評価とした。発表が2回に分か

れる授業では、2回目は「沖縄研修旅行において、高校生が興味を持って取り組める活動とは、どんなことですか。」を考察させた。

相互評価の結果については、【資料3-4-5】に示したように、項目ごとに集計し、「3」と評価した者の数、「2」と評価した者の数、「1」と評価した者の数を示し、合計点を評価人数で除した平均得点を合計してグループの得点とした。

「先生がこんなに大変な思いをして修学旅行を計画していたなんて知らなかった。」という感想を成果と受けて止めている。

(5) ボランティア活動

現行の学習指導要領は、生徒の体験的な学習、特にボランティア活動や自然体験活動の充実に努めることを求め、特別活動では、学級・ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事のい

ずれの内容にもボランティア活動が示されている。

そこで、学習指導要領を中心に、ボランティア活動の理解に努めた。

『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』では、ホームルーム活動の内容の解説で、「ボランティア活動は、個人の自由意思を基本とし、自分の技能や時間等を進んで提供し、他人や社会に貢献する活動とされ、他人を思いやる心、互いを認め合い共に生きていく態度、自他の生

命や人権を尊重する精神などに支えられている。また、よりよい社会づくりに主体的かつ積極的に参加・参画していく手段として期待されている。」と示されていることを強調し、受講生にボランティア活動の体験を紹介して貰った。その際、参加する前と、参加後の気持ちの違いにも触れるよう促した。

また、グループワークでは、生徒会のボランティア活動を企画することを試みた。

特別活動論テキスト「為すことによって学ぶ」を使用し始めた2016年度の授業からは、神奈川県非常勤講師 中村眞一先生が執筆された中学校第1学年〇組「学級活動」指導案(例)「ボランティアから生まれる新しい自分」を使用し、学級での指導についても学んでいる。

体験談から知り得たことは、神奈川県では前の県知事が高校生にボランティアを課す取り組みを行ったが、多くの学校では通学路のゴミ拾いが行われていた。中には、海岸や河川のゴミ拾いを行った体験もあった。地方から来た者に

【資料3-4-5】 相互評価の結果発表

班	氏名	対象	評価項目	評価				評価数	平均得点	得点
				3	2	1	計			
13		プレゼン	① 計画内容	17	11	3	76	31	2.45	9.4
			② 高校生の興味	9	19	3	68	31	2.19	
			③ 安全対策	14	14	3	73	31	2.35	
			④ パワーポイント	14	15	2	74	31	2.39	
		要項	① 必要事項	20	11	0	82	31	2.65	5.2
			② 費用の使途	17	14	0	79	31	2.55	
6		プレゼン	① 計画内容	15	16	0	77	31	2.48	9.7
			② 高校生の興味	13	17	1	74	31	2.39	
			③ 安全対策	21	7	3	80	31	2.58	
			④ パワーポイント	11	17	3	70	31	2.26	
		要項	① 必要事項	16	15	0	78	31	2.52	5.0
			② 費用の使途	15	16	0	77	31	2.48	
5		プレゼン	① 計画内容	14	18	0	78	32	2.44	8.4
			② 高校生の興味	8	23	1	71	32	2.22	
			③ 安全対策	8	20	4	68	32	2.13	
			④ パワーポイント	2	17	13	53	32	1.66	
		要項	① 必要事項	14	16	2	76	32	2.38	4.6
			② 費用の使途	13	15	3	72	32	2.25	

は、チームを作って高齢者住宅の除雪作業やゴミ出しを行ったり、保育園などで読み聞かせや介護施設での演奏会を繰り返し行っている者もあり、都市部の学校より地域に根差した活動に取り組んでいることが伺えた。

先に示した『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』のホームルーム活動の内容の解説には、続けて「したがって、生徒が自らも社会の一員であることと社会における自分の役割を自覚し、互いが支え合う社会の仕組みを実感する上で重要な意味をもつとともに、他の人々や社会のために役立つ体験をしながら、そのことを通して自尊感情を高め、自己実現を図り、自他が共に価値ある大切な存在であることを実感し豊かな心情を培うことができる活動である。」と示されている。

通学路のゴミ拾いという作業が、自尊感情を高め、豊かな心情を培うことができればよいのだが。

高等学校では、生徒のボランティア活動を科

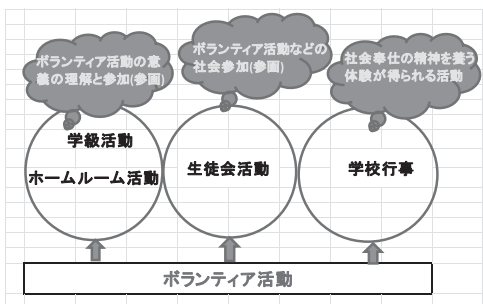
目の履修とみなし、単位が認められることがあ  
ることを次の文部省告示を示して補った。

○ボランティア活動等に係る学修の単位認定 (学校教育法施行規則第98条第3号, 平成10年文部省告示第41号)

校長は、生徒のボランティア活動等に係る学修を高等学校における科目の履修とみなし、単位を与えることができます。具体的には、(1) ボランティア活動, (2) 就業体験 (インターンシップ), (3) スポーツ又は文化に関する分野における活動で顕著な成果をあげたものに係る学修ですが、高等学校の単位として認定する以上、当然、高等学校教育に相当する水準を有すると校長が認めたものに限られます。

2017年3月に発表された次期中学校学習指導要領では、学級活動の内容から「ボランティア活動の意義の理解と参加」は削除されたが、【資料3-5】の図を示して、特別活動の「学級・ホームルーム活動」「生徒会活動」「学校行事」の各活動・学校行事を通してボランティアに取り組み、生徒が社会の一員であることを自覚し、よりよい社会づくりに参画する態度を養うことが大切だと伝えてきた。

【資料3-5】



## (6) 部活動

部活動は、教育課程外の実施活動として行われ、特別活動の内容に含まれるものではないが、その実態を知り顧問教員としての在り方を考えることは、教員を目指す者には欠かせない

と考え、特別活動論で扱っている。

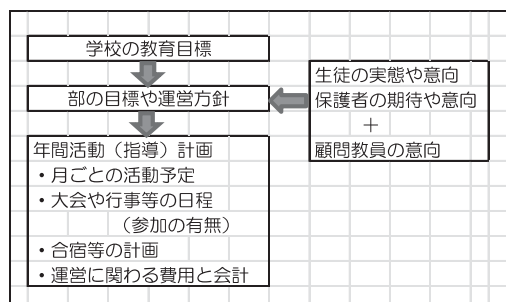
内容は、「部活動の実態と意義」と「部活動が抱える問題点と解決への模索」を取り上げた。

筆者は、部活動に関して、これまで神奈川大学 心理・教育論集に二つのレポートを発表した。ひとつは「義務教育における部活動の変遷」と題し、1992 (平成4) 年3月発行の第10号に発表した。内容は、平成元年の学習指導要領の改訂で、「部活動」がそれまでのクラブ活動と同等の効果が認められことを契機に、部活動の変遷を探り、クラブ活動との相違を示し、その上で、現状の問題点と解決策を、公立中学校において部活動の組織運営にあたった経験を中心に考察を進めた実践報告である。併せて担当した部活動の日誌から生徒の声を紹介した。

もう一つは、1995 (平成7) 年6月発行の第14号に「部活動再考の視点」を載せた。内容は、学校教育で課外活動として行われている「部活動」に光を当て、「生徒」「顧問教員」「親」の三者が、それぞれ抱える問題を整理した。その上で、それらの問題を解決する手立てを模索し、部活動は、生徒の自己実現を目指し、同時に自主性、自発性の伸長を図るために、学校と親が価値観の共有に努めなければならないと記した。

授業では、これらを基に進めている。まず、部活動は、教育課程外におかれる活動だが、学校が行う教育活動であり、それぞれの学校が掲げる教育目標を実現する活動として指導が行われなければならないことを強調し、【資料3-6-

【資料3-6-1】 目標・指導方針の決定



【資料3-6-2】 部活動の現状

	中学校 (%)			高等学校 (%)		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子
生徒の運動部等への所属状況						
運動部に所属している者	73.9	83.0	64.1	49.0	56.3	41.1
地域のスポーツクラブに所属している者	7.7	10.2	5.0	4.2	5.7	2.6
文化部など運動部以外の部に所属している者	17.1	7.9	27.1	22	13.8	30.9
学校以外の文化的教室等に所属している者	7.0	3.9	10.4	3.1	1.4	5.0
どれにも所属していない者	7.8	7.6	8.2	27.3	28.1	26.2

※複数回答可（中学校100校、高等学校100校の生徒を対象）

1] に示したように、部活動の目標や運営方針は、学校教育目標を受け、生徒の実態や意向、保護者の期待や意向、更には同僚の意向を踏まえて決められるもので、けっして顧問教員が恣意的に決定するものではないことから始めた。

部活動の現況については、文部科学省が1997（平成9）年12月に発表した「運動部活動の在り方に関する調査研究報告（中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議）」の報告から【資料3-6-2】を作成し、所属の状況を示した。そして、「調査対象の中学校・高等学校の全てで運動部が設けられ、中学校で73.9%、高等学校で49.0%の生徒が何らかの運動部に所属していたこと。1校当たりの

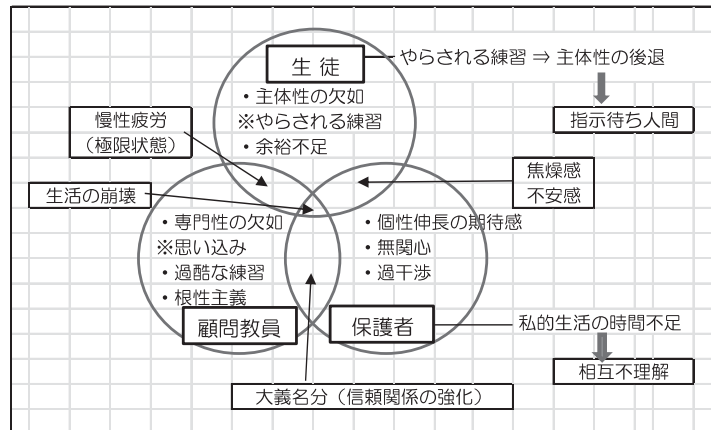
運動部数と1部当たりの部員数は、中学校では約15部・約30人、高等学校では約24部・約20人であったことを説明に加えた。

部活動が抱える問題点については、【資料3-6-3】に示したように、「生徒」「顧問教員」「保護者」の三者について、筆者の著作から引用して紹介した。特に、生徒の主体性の欠如、顧問教員の専門性の欠如、保護者の個性伸長の期待感については、公立中学校での体験を紹介した。

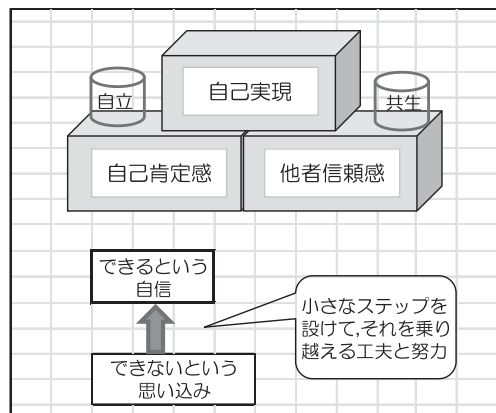
その上で、部活動は、生徒の自己実現を目指すもので、そのために、生徒の自己肯定感と他

者への信頼感を育む必要があることを説明した。更にその具体的な方法として、小さなステップを設けることが必要であり、そのステップを乗り越える工夫と努力を、生徒と教員がともに積み重ねて、ようやく生徒の「できないという思い込み」を「できるという自信」に変え

【資料3-6-3】 部活動が抱える問題点



【資料3-6-4】





ることができる」と強調した。

また、それは教科学習においても同じことで、そこにこそ教員の指導力が求められるのだと伝えた。

演習は、顧問教員として「生徒」「保護者」「同僚」に対してどのような心構えが必要なのかをグループ討議に課した。

## (7) 論作文への対応と評価

### ① 論作文

「論作文」という用語は、一般には耳慣れないが、ほとんどの自治体が教員採用選考試験で課している。そこで、授業では演習の時間など、空いた時間を利用して次の点について説明してきた。

- ・ 論作文とは
- ・ 論作文を書くためには
- ・ 論作文で求められる資質能力とは
- ・ 論作文の評価の観点について

「作文」が自分自身の心情や経験を主とするのに対し、「論作文」は広い視野から自分の意

見を整理したものであることを説明し、日頃から「教育」に関する自分の意見を持ち、それを文章に表す試みが大切なことを話した。

そこで、対策として文部科学省のHPで紹介している「トレンドキーワード」から「体罰」「いじめ」「キャリア教育」「不登校」「特別支援教育」等を開いて、情報を入手し基礎資料にすることを薦めた。

授業でレポートを課しているが、それは自分の考えの「根拠」として経験や体験を示せるように整理することを求めもので、その作業が採用試験対策に繋がることを伝え、更に次の点について準備しておくことを薦めた。

- 1) なぜ、教員を目指したのか
- 2) どのような教員を目指しているのか
- 3) どのような使命感を持つ教員を目指すのか

論作文の評価は、「問題文の意図を理解し問われている内容に沿っているか」、「教育に対する知識を身に付けているか」、「答えを導き出そうとする思考に自分の経験や体験を示すことができるか」などに加え、「論旨が一貫しているか」という点が一般的であり、次の神奈川県論作文評価項目を併せて紹介した。

#### <表現>

文章の構成  
分かりやすさ  
表記の正確さ（誤字、脱字）  
文字数（650字以上825字以下）

#### <内容>

着想  
論旨、結論（明確さ、説得力）  
自分の考え

論作文の実践は、毎年、最終授業でポストテストとして行った。課題は、「特別活動が『為すことによって学ぶ』といわれる理由を、自己の経験を交えて述べなさい。文字数は800字以内とします。」とし、前の

### 【資料3-7-1】 個人の評価票

学科		氏名		
【個人記録・レポート】				
月	日	課題内容	満点	評価
4	20	自覚を深めるためにできること	5	
5	11	ソシオメトリーに見る生徒の特徴	5	
5	18	学級活動演習・相互評価	5	
5	25	生徒会活動(文化祭活動の自己への助言)	5	
6	29	集団・宿泊的行事相互評価①	5	
7	6	集団・宿泊的行事相互評価②	5	
6/29	7/6	研修旅行計画・個人	5	
7	13	ボランティア活動演習	5	
		A	40	
【グループワーク相互評価】				
5	18	学級活動演習	9	
6/29	7/6	学校行事演習(旅行計画)	12	
6/29	7/6	研修旅行説明会要項	6	
7	13	ボランティア活動演習	9	
		計	36	
		B(換算)	40	
【post test 論作文】				
7	24	部活動	C	20
		A+B(換算)	80	
		A+B(換算)+C	100	



週の授業で示している。ただし、受講生が多くて演習の発表に時間を割かれてしまう場合は、部活動に関して報じられた新聞記事を予め配付して、「部活動に関する紹介記事を踏まえ、教育課程外学校教育活動として行われている部活動の顧問に求められる心構えを、自己の経験を踏まえて述べなさい。」とし、部活動の演習を兼ねている。

## ②評価

評価は、「2 特別活動論の授業計画」で紹介したように、課題レポートが40%、演習による相互評価が40%、最終の論作文試験が20%を基本的な配分として行っている。

課題レポートは、5段階で評価し「A」「B」「B-」「C」と表記して返却した。演習の相互評価の際も、【資料3-4-4】で紹介したように、その演習の要点を整理させ、課題レポートに加えた。

演習による相互評価は、【資料3-4-5】で紹介したように、出席した受講生が各評価項目を3段階で評価し、項目ごとに全評価者の平均点を求め、加えたものをグループの得点として発表した。

受講生には、論作文テストの前に、【資料3-7-1】の評価票を配付し、それまでの個人の

得点を確認させている。

## 4 集団活動を通して自己実現を図るための支援

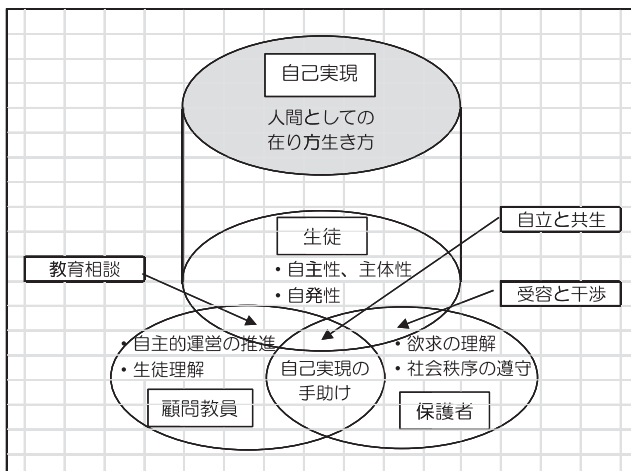
### ①特別活動の特徴

特別活動の特徴は、【資料4-1】に示したように、学校行事が、全校・学年・学科の規模で行われ、生徒会活動は「異年齢集団」での活動に特徴がある。学級・ホームルーム活動は、比較的少人数で行われる活動だが、いずれも「望ましい人間関係」と「自主的、実践的態度」を育てることを目標に含んでいる。そして、「人間としての在り方生き方」についての自覚を深める活動が「特別活動」とされている。

#### 【資料4-1】 特別活動の特徴

学校行事	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全校・学年規模</li> <li>・イベント</li> </ul>
生徒会活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全校規模</li> <li>・異年齢集団</li> </ul>
学級活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・40人規模</li> <li>・同一年齢集団</li> </ul>

#### 【資料4-2】 部活動で生徒の実現を支える取り組み



中学校及び高等学校の『学習指導要領解説 特別活動編』には、「一人一人の生徒が様々な集団に所属して活動することによって、生徒の人間関係も多様になり、生活経験も豊富になるなど、他の教育内容とは異なる意義が認められる。また、これらの活動を通して、好ましい人間関係を形成するために必要な能力や態度、所属する集団の充実・向上に努めようとする態度、社会の一員としての自覚と責任ある態度、人間としての生き方を探究し自己を生かす能力や態度などが養われることが期待される。」と記され、小学校の同書には「児童が種々の集団に所属して活動するこ

とにより、人間関係が拡充され、生活経験が豊かになるとともに、思いやりの心、ともに生きていく態度、自己責任の自覚、自律・自製の心など豊かな人間性や社会性を身につける事ができるのであり、特別活動には、他の教育活動とは異なる役割がある」と記されている。

そして、このような特色は「特別活動に特に顕著なもの」と結んでいる。

更に中学校及び高等学校の学習指導要領解説には、「特別活動は、実際の生活経験や体験活動による学習、すなわち「なすことによって学ぶ」ことを通して、全人的な人間形成を図るという意義を有している。実際の生活体験を通して教師と生徒及び生徒相互の直接的な触れ合いが緊密になり、学校や学級の生活が明るく豊かになり、しかも有意義な変化をもたらすことが期待できるのである。また「なすことによって学ぶ」ことを通して、教科等で学んだことを総合化し、生活や行動に生かすという自主的、実践的な態度を育てることができる。このような活動は、活動の内容や場面も多様であり、創意工夫の余地も広いので、学校生活全般にわたって生徒の積極的な意欲を育てるために適切な機会となる。」と記している。

そこで、特別活動の特徴を「為すことによって学ぶ」と伝え、生徒の「自己実現」を図ることにその教育的価値があると伝えてきた。

## ②自己実現を図るための支援

教員の役割は、生徒の自己実現を図る取り組みを支援することであり、それに関しては各所で実践的な取り組みを紹介してきた。

現行の学習指導要領には、「総則」に、「総合的な学習の時間における学習活動により、特別活動の学校行事に掲げる各行事の実施と同様の成果が期待できる場合においては、総合的な学習の時間における学習活動をもって相当する特別活動の学校行事に掲げる各行事の実施に替えることができる。」と示している。

教育課程の大半を占める教科指導で獲得した

知識や技能を、「特別活動」に「総合的な学習の時間」を加えた取り組みで、「集団や社会の一員として、よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を身につける」ことができると考えている。

つまり、学校は「教科指導」と「特別活動および総合的な学習の時間」を生徒活動の両輪と捉えて運営する必要がある。

先に紹介した1992(平成4)年3月発行の神奈川大学 心理・教育論集第10号に発表した「義務教育における部活動の変遷」では、筆者が横浜市内永田中学校において部活動を通して生徒の自己実現を支援した事例を述べた。

部活動の顧問教員は、ステップに挑戦する生徒を励ます存在であり、生徒理解に立って生徒の自主的運営を推進する存在であることが望ましいと考え、生徒は、生徒会に「部長会」を組織し、教員は、全員が顧問に就き、部活動の運営に関わる業務を分担し、「代表顧問会」を組織した。保護者は、生徒の欲求を理解した上で社会秩序の遵守を促す存在であって、ともに自己実現を目指す生徒を支える存在であってほしいとの願いから、PTA組織とは別に、各部に世話人会を組織し、「代表世話人会」を通して共通理解を図った。

授業では、生徒は、顧問教員との教育相談を通して、自主性、主体性、自発性を伸ばさせ、人間としての在り方生き方を探求するような活動が、抱える問題点を解決する方策であることを「資料4-2」を用いて述べた。

## 5 まとめ

筆者は、2012(平成24)年度から、神奈川大学横浜キャンパスで特別活動論の授業を担当し、翌年度からは平塚キャンパスでも担当するようになった。授業では、「学習指導要領解説

特別活動」を使用するとともに、自らの実践資料に説明を付した「特別活動論ノート」を印刷し、その都度、配付していた。2013年度後

期の平塚キャンパスでの授業では、それを一冊に綴じたものを作成して使用を試みた。

2013（平成25）年度に、神奈川大学の教職論テキスト「教職への道」を編集する機会を得たこともあり、その経験を踏まえ、特別活動論の演習に供するテキストを作成したい希望を抱いていた。

そこで、2016（平成28）年度、神奈川大学で特別活動論を担当することが内定した非常勤講師の斎藤元先生、中村眞一先生、高橋正尚先生に声をかけ、2015（平成27）年9月2日に特別活動論テキストの編集会を筆者の研究室で開いた。筆者が授業で使用していた前述の「特別活動論ノート」を叩き台にして内容を話し合った。テキストには、項目ごとに演習課題を載せることとし、演習事例を持ち寄ることにした。

送って頂いた資料をもとに、筆者が冬休みから編集を始め、2016（平成28）年2月22日に第2回編集会を行った。その結果を踏まえ、構成と体裁を整え、24日には第2版を送付し校正の指摘を受けた。そして3月3日に神奈川大学生協に印刷を依頼し、4月からの授業で使用する事ができた。

表紙には、「神奈川大学教職課程 特別活動論テキスト 為すことによって学ぶ」と記した。これは、特別活動の特徴である「為すことによって学ぶ」をそのままテキストの書籍名にすることを提案して承諾を得たものだ。また、中央には、横浜キャンパスの神大橋から撮影した桜の写真を載せた。

2016（平成28）年12月17日には、テキストを使用した授業の振り返りを行うため、編集会を開いた。これには、2017年度の特別活動論を担当する専任教員の間山広朗先生にも参加して頂いた。それぞれが工夫した演習の報告と質問・意見交換を行い、その場でテキストの継続使用を確認した。

特別活動論テキスト「為すことによって学ぶ」が版を重ね、より良きものに改訂され、使用されることを願い、次頁以降に縮小して載せた。

その掲載をもって、レポートのまとめに代える。